

## 娯楽マンガ作品を教材に

### —『暗殺教室』に描かれた理想の教師・学校像—

Using entertainment manga works as teaching materials:

Ideal image of teacher and school drawn in “Assassination Classroom”

茶谷 薫 CHATANI Kaoru

#### はじめに

筆者が以前述べたように、「学習マンガ」と、それとは異なる一般の「娯楽マンガ」には違いがあり、娯楽マンガを学習に役立てられれば、一層、学習効果が出ると考えられる<sup>(1)</sup>。端的に言えば、学習内容を分かりやすく漫画化した「学習マンガ」は多数あり、その学習効果も認められている。しかし、それは娯楽性よりも学習を第一の目的としているため、所謂「面白さ」が不足しがちである。一方で、娯楽性が重視される一般的なマンガは「面白」く、そのために読みやすい。従って、それを教材として巧く活用すれば、学生や生徒・児童への学習効果も一層期待できると考えられる。ただし、その作品に描かれたものから、何を具体的な「教材」とするか、が難しい。

そこで、筆者は娯楽マンガの具体的な教材化を目指し、授業でも例示などを通じて実践している。本稿では松井優征の『暗殺教室』<sup>(2)</sup> から教材の例として使用できる点を列挙する。また、この作品は読者や作者が意識的もしくは無意識に感じている現在の日本の学校や教師の問題点を抉り出していると思われる。この点についても論考する。

#### 『暗殺教室』選定経緯および理由

筆者が当該作品を知ったのは、書店のマンガコーナーで平積みになった単行本を目にした時であった。その刺激的なタイトルとともに、表紙デザインも印象深いものであった。当時、巻数が10巻を超えていたため、「人気がある作品だ」と感じた記憶はあったものの、実際に読んだことは連載終了までなかった。この作品は集英社の「ジャンプ・コミックス」に所収されている。巷間知られているとおり、『週刊少年ジャンプ』は読者アンケートを取り、その結果により人気が見込めない作品は連載終了を促され、人気作は連載が長く続く。10巻を超える単行本が発刊されたということは、人気作であることの証左である。これが、筆者が当該作品に着目した最初の記憶である。

2019年、筆者は所属先の名古屋芸術大学芸術教養領域の某学生から、その人の所有するマンガ単行本を数作品、貸してもらった。その中に『暗殺教室』があった。その学生は自身でもマンガを描き、その絵も巧みであり、「マンガ愛読者」でもある。つまり、様々な観点からマンガ作品を評価する力があると期待される。加えて、その学生から、その世代に好まれるマンガ作品を知ることできる。換言すれば、マンガを好む学生は、マンガ研究をしている筆者にとり、貴重なアドバイスをくれる点においても重要な存在である。

そこで貸与された『暗殺教室』を一読したところ、大変面白く、それは連載誌がターゲットとする子どもたちの気持ちを捉えるだけの娯楽性だけで済ませられるものではないと感じられた。また、この作品を知らない学生は少なく、親しみやすい点でも授業の教材として好適であろう。

## 『暗殺教室』の概要

### 単行本構成・関連本

上項で少し触れたが、『暗殺教室』は松井優征により描かれ、集英社の『週刊少年ジャンプ』に2012年から2016年まで連載された。単行本も2012年から2016年にかけて1巻から21巻の初版が発行された。21巻には、本編の最終話までの3話と、番外編が4編、作者の松井が『暗殺教室』を描く前に『ジャンプNEXT』の2011 SUMMERに掲載された読み切り短編が1編、「あとがき」が複数掲載されている。上記の番外編よりも短い関連作品が掲載された巻もある<sup>(3)</sup>。各単行本のカバー下にある、本体の表紙と裏表紙には、登場人物の「殺せんせー」(後述)の色や表情の意味と、故事や他の作品に因む語録が掲載されている。

単行本の副題にもなった各話のタイトルは、学校の授業にちなみ、「暗殺の時間」、「大人の時間」、「卒業の時間」、「ありがとうの時間」など「～の時間」という形でまとめられている。また、巻末に「パズルの時間」として、論理学や国語など勉学に繋がるパズルが掲載されている単行本が4冊ある<sup>(4)</sup>。

『暗殺教室』はアクションと人情、笑いなどを上手く配分した人気作であるとともに、学校が舞台になっていたため、作品と連携した英単語や英熟語、英文法、数学の参考書が複数発行された<sup>(5)</sup>。参考書以外にも、人気マンガ作品では通例のテレビアニメ化、実写およびアニメーションによる映画化もされるなど、メディアミックス大作としても知られる。

### あらすじ

舞台は高偏差値中学校にある3年E組(3-E)で、主人公は身長不足に悩み、これといった特技のない男子生徒である。このクラスは成績不良や素行が芳しくない生徒を集めて編成され、教室も通常の校舎から隔離された山上に作られた古い校舎にあった。生徒たちは学校の中で屈辱的な差別を受ける側、被差別者として描かれている。ある年の4月、この教室に防衛省の役人と、巨大な蛸のような異形の者が現れた。これが物語の発端である。

この異形の者は後日、ある生徒により「殺せんせー」と名付けられた。殺せんせーは、その時すでに月の大半を破壊したと考えられていた。また、翌年の3月までに自分を殺さなければ、地球を爆破すると通告していた。政府や防衛省側もそれを信じざるを得ない状況に追い込まれていた。何故か、殺せんせーは3-Eの担任を希望し、政府もそれを受諾

した。そのため、殺せんせーが防衛省の役人とともに、クラスに現れたというわけだ。一方、政府・防衛省は生徒たちに「殺せんせーを殺せば100億円を出す」と暗殺を要請する。申し出に戸惑った生徒たちも、これを受諾し、教室を舞台に生徒による暗殺の試みが繰り返されるようになった。これが『暗殺教室』という題名の由来である。

殺せんせーが地球を破壊する能力を備えていることなど、一連の事情を知る者はごく僅かで、生徒たちは誰にも口外しないことを約束させられた。殺せんせーはこのクラスの生徒に危害を加えない条件を了承したが、それ以外、例えば家族や友人などは対象外であった。これが生徒たちの足枷ともなった。他にも様々な条件があるが、主人公を含む当該クラスの生徒たちは、法外な報酬や、自身の存在理由を求め、殺せんせーの暗殺を試み始めた。しかし、目的は成就せず、月日が流れていった。

一方、担任を希望した殺せんせーは全ての教科の授業が非常に上手く、生徒には親切で、反発心を抱く生徒たちの気持ちをも掴む、優れた教師であった。そのため、生徒たちも殺せんせーに親近感を覚えるようになった。そこに世界中から殺せんせーを狙った暗殺者がやってきた。暗殺者は、日本人、外国人など人間だけではなく、兵器のAI（人工知能）システムを積んだ自律砲台や、殺せんせーと同様の身体的な仕組みを持つ者など、多種多様であった。暗殺者の一部は転入生、つまり生徒となったが、殺せんせーは教師として彼らの信頼も得ていった。

物語の終盤には、生徒の一人が暗殺者であると発覚した。その生徒との戦いに関連し、殺せんせーが、元来は人間であったことや、並外れた身体的能力を備えた異形の者となった経緯が明かされた。殺せんせーの告白を聞き、その過去を知った生徒たちは殺せんせーを殺さずに済む方策を探るようになった。その結果、殺せんせーにより地球が滅亡する確率が非常に低いことを知るに至った。しかし、各国政府や、殺せんせーを生み出した科学者は殺せんせーを破壊しようと狙い続けたのだった。

物語は4月に始まり、一学期、夏休み、二学期、冬休み、三学期まで続く。その間、学期の中間試験や期末試験、修学旅行、球技大会、運動会、学園祭、演劇発表会など、暗殺試行を含んだ様々な事件が発生する。最終的に、殺せんせーは、教室に現れた約1年後の3月に、生徒たちの手により葬られる。これが物語の主軸である。

本編の最後は、後日譚である。生徒たちが殺せんせーを葬った直後の卒業式を経、中学3年次を終えるシーンや、彼らの7年後の姿が描かれた。7年後生徒達は、家業を継いだり、女優や大学4年生になったりしていた。主人公は教員を目指し、荒れた学校で教育実習をしていた。主人公が荒んだ生徒達を前に、殺せんせーを彷彿とさせる姿を見せたところで本編は終わった。

## 『暗殺教室』で学べる内容

『暗殺教室』には学びに活用できる事柄がいくつも掲載されている。日本語や英語のほ

か、フランス語、韓国語、ポルトガル語が学べる部分もある。また、通信添削教育を長年行っているZ会に依頼して作成された、ある意味、非常に正統的な数学の問題もそのまま出題されている。本稿では、以上のような明確に勉学と関連するものではないものについて説明する。

### 歴史・地理・政治・経済に関係すること

単行本9巻の扉絵は、「暗くてお靴が分らないわ」と靴を探す芸妓に、成金の山本唯三郎が「どうだ明るくなつたろう」と百円札を燃やす風刺画をもとにしている。この風刺画は多くの日本史の教科書に取り上げられてきた。『暗殺教室』の扉絵は、他にも5巻の『あしたのジョー』のリングの端にジョーが俯いて座っている（もしくは眠っているか死んでいる）シーン、12巻の絵本『ぐりとぐら』の表紙、17巻のラグビーワールドカップでの五郎丸歩選手の様子、19巻のメンソレータムのマスコットキャラクターなど、様々なパロディ作品ともなっている。他にも、ガットスン・ボーグラムとリンカーン親子が米国サウスダコタ州のブラックヒルズにある岩山（マウント・ラシュモア）に彫った4人の大統領のモニュメントを基にしたパロディ画もある。この4人の大統領は、ジョージ・ワシントン、トーマス・ジェファースン、セオドア・ルーズベルト、エイブラハム・リンカーンである。砂場で大阪（坂）城を造り、着替え、お茶を点てる殺せんせーの場面からは、千利休や、堺と大阪（坂）、豊臣政権下の大坂城と徳川政権下の大坂城、それらの前にあった石山本願寺などへも話を発展させられる。また、カルタゴのハンニバル、真田幸村の浪人時代なども出てくる。これらを糸口にすれば、様々なことを教えられよう。

殺せんせーが世界各地に飛び、様々な食事を口にしたり、遊んだりする様子も出てくる。中国四川省で麻婆豆腐、上海で杏仁豆腐を食べ、ベトナムコーヒーやインドのチャイを嗜み、イタリアでジェラートを買い、カナダにメープルシロップを絞りに行き、北極の氷でかき氷を作り、ニューヨークでスポーツ観戦し、ハワイで映画を観、タージ・マハルと思しき建物の屋根で寛ぐ様子などである。他にもドバイ、フィリピンなどの地名や、経度という地理用語が出てくる。性転換手術ができる場として知られたタイやモロッコについても触れられている。

スラブ系の言語の接尾辞である～vic（ヴィチュ、Vich）については、マンガでの説明が少し不正確であることも重要であろう。Vicは男の名につく接尾辞であり、女の登場人物の名としては、実は相応しくない。メヘンディアート（ヘナタトゥー、ヘナアート）が出てくるが、これは、ヘナを含んだ泥状の物質を用い、美しい模様を皮膚に描き、ヘナの色素を皮膚に沈着させ、呪術的な護身や、ファッションとして利用するものである。これはインドなどで伝統的に行われてきたが、世界に広がったもので、文化の伝達の例としても興味深いものである。

殺せんせーが生徒とともに京都へ修学旅行に行く話も描かれている。ここでは、坂本龍

馬が暗殺された近江屋、織田信長の暗殺された本能寺、後者が現在は別の場所にあることなどが説明されている。また、祇園、清水寺、八坂神社、二寧坂（二年坂）三年坂（産寧坂）などの地名や、土産物として売られている七味も登場する。夏期の旅行の舞台となる沖縄については、海底洞窟が描かれている。この場面から、琉球列島は石灰岩性で、石灰岩は鍾乳洞や中国の桂林など、雨水などによる浸食作用で洞窟ができやすいことなどが説明できる。

政治経済にかかわる話も幾つかある。アフリカ開発会議（TICAD、Tokyo International Conference on African Development）については、「アフリカの貧困にちょっと共感して調べてたら（殺せんせーに）実際に現地に連れてかれて」「さらに興味が広がっただけで」という生徒が出てくる。TICADは日本が1993年から主導する国際会議で、日本の外交戦略上も重要なものである。貧困で問題となるのは、人身売買や売春であるが、「傭兵」の問題もある。『暗殺教室』には、能力の高い「傭兵」集団が出てくるが、これを糸口に貧困について話すことも可能だろう。

また、生産調整で鶏卵が廃棄されるニュースが報道され、廃棄される鶏卵でプリンを作る話も出てくる。農畜産物の供給量が需要を大きく上回ると、原価をかなり割り込むこととなり、生産調整という名で、多くの食物が捨てられる問題は、経済のみならず、飢餓を考えさせるテーマである。

「職安」という言葉も出てくるが、この「公共職業安定所」に「ハローワーク」と名が付けられた現代史や、ハローワークの役割も教えられるだろう。「住宅バブルに見せかけて」という一節もあるが、バブル経済が過去に幾度もあり、昭和末期から平成初め頃のバブル時代と、その後の不況について学ぶ契機ともなる。「帰化」という言葉もあるが、古代史における上田正昭が提唱した「帰化人」と「渡来人」の違い、「帰化」の意味や手続き、国籍をめぐる問題など、様々なことを教える糸口となる。

## 科学に関すること

ある登場人物の「本当の理科は暗記だけじゃ楽しくない」「君（ある物質のこと）が君である理由を理解（わか）っているよ」という台詞は、科学の面白さを理解する前に、暗記ばかりの、興味が全く湧かない科目だと捉えている児童、生徒、学生には重要である。科学は（歴史学も地理学も、その他の科目も）、暗記が重要なのではなく、様々な物事の理由を観察や実験を通じ、論理的に解明していく過程の理解や、観察・実験そのものが重要なのである。他に、物理学、化学、生物学、地学に関係するものを挙げていく。

殺せんせーはマッハ20で移動する、という設定だが、「マッハ」とは何か、「音速」がどのように変化するか、などを教える導入として利用できる。「ダイラタンシー（ダイラタンシー、レイノルズの膨張原理）」という言葉もあり、それが「防弾チョッキに応用」されるとあるが、その実用化への道程は長い。この現象の著名な例は、石川県の西側にある千里

浜渚ドライブウエーである。ここから、地理学や観光学などの知識を入れた総合的な学習に繋げる方が容易である。基本的な物理学としては「梔子（てこ）の原理」に触れられている項目もある。また、殺せんせーを葬るために開発された武器の欠点として、エネルギーのチャージに長時間かかり、「100%までチャージすると…衛星の位置が丸わかりになり、「エネルギーの一部が透過光として発散されてしまい上空で月より明るく輝いてしまう」ことが挙げられている。これは、光もエネルギーの一部であること、充電に時間がかかることがEV（電気自動車）の問題点として挙げられていることなどを学ぶ導入部として活用できる

化学や家庭科に関することも多い。上で触れた、生産調整の廃棄鶏卵を用い、巨大プリンを作るエピソードがある。プリンの基本材料は砂糖、牛乳、卵、バニラオイルであるが、凝固剤としてゼラチン、寒天の繊維が利用されることも分かる。凝固する温度が低い蛋白質のゼラチンと、比較的高い温度でも固まる食物繊維の寒天の違いを説明することもできるだろう。「寒天はゼラチンよりも融点が高い」という言葉があるが、「融点」と「凝固点」の言葉の意味の違いなどについても触れられる。

ダニエル電池、ボルタ電池という用語や、水酸化ナトリウム、酢酸タリウム、王水、エタノールといった化学実験や、犯罪で有名になった言葉もある。殺せんせーの体が炭素化合物と珪素化合物（ガラスや岩石）でできている、という記述も、有機物や、生物化学への興味を喚起させられよう。

生物についても多く触れられている。舞台の教室がある山に様々な生物がいる設定だからだ。「サナギから羽化をするチョウやハエは完全変態」、バナナやパイナップルに焼酎をかけ、それをストッキングに入れ、1～2日置いて発酵させて作る捕虫トラップ、ミヤマクワガタといった昆虫に関する知識が出てくる。学園祭で供する食材として、マツタケ、タマゴタケ、マテバシイのドングリ、自然薯と「むかご」、クリ、カキ、クルミ、ヤマブドウ、アケビ、ヤマメ、イワナ、オイカワ、テナガエビなどを山から採る場面がある。ヤマブドウと似ている有毒のヤマゴボウ、毒キノコのベニテングダケなどとの見分け方も描かれている。別の場面では、アルビノ、「ホホワイトアイ」という変異や、ニホンカワウソ、リクガメなどについても少し触れられている。

生態系の維持についても、殺せんせーが「これ以上採ると山の生態系を崩しかねない」、「植物も鳥も魚も菌類も節足動物も哺乳類も あらゆる生物の行動が「縁」となって恵みになる（中略）君達がどれほど多くの…「縁」に恵まれて来たことか」と述べる場面がある。これは生態系を表すecosystemの「eco」がギリシャ語の「oikos（家）」に由来していることと併せて学べば、世界の複雑さを感じられるかもしれない。

地学に関することは、殺せんせーが破壊したことになっている月について重要な台詞がある。「昼だけど三日月が出ている」という台詞の意味することは、当然ながら、次のようになる。弓状（バナナ型）の細い月は、月齢が小さいときと、大きいときがあり、前者は

日没直後に、後者は日の出前に見え、太陽が高い位置にある「昼」は見えない。これは月の満ち欠けなどを学ぶ入り口となる。

また、ISS（国際宇宙ステーション）に主人公ともう一人が侵入するエピソードがある。帰還する際の着陸地点が校舎のある丘となっているが、そのリスクなどを説明すると、深い学びが可能になろう。

## その他

上述した殺せんせーを殲滅するための作戦で、「地の盾」と「天の矛」という武器が出てくる。それらの名称は「盾と矛」からきているが、「矛盾」という熟語を説明すると更に理解が深まるだろう。主人公のライバルともなる登場人物の名が「カルマ」であることは、「業」という言葉や、その意味、起源を知る契機ともなる。「国破れてミサンガあり」という言葉も、杜甫の『春望』の「国破れて山河あり」と、ポルトガルや南米が起源と言われる「ミサンガ」を合わせた言葉遊びであるが、これらの知識を学ぶ糸口になる。

文学についても、名作のタイトルがいくつか登場する。アレクサンドル・デュマ・ペールの『モンテ・クリスト伯』が『巖窟王』とも邦訳されたこと、ジェローム・デイヴィッド・サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』が青春小説の名作であることなども伝えられる。苦学した島本健作（朝倉菊雄）の『赤蛙』が伊豆の修善寺で公園の名称となっていることは、地理学と連動させられる。「能因本系の「清少納言枕草子抄」などから引用して日本語の変遷を分析させる」という台詞からは、古典文学の注釈書が古くから存在することや、印刷技術のなかった時代の作品には、様々な写本が存在することなどを教えられる。

他にも、「ケイドロ」という遊びが「警察と泥棒」を模した「追いかっこ」の一種であることや、「来ないなら先生に借りてた花男の仏語版（フランス語版）を借りパクしちゃう」という台詞からは、『花男（花より男子）』などの有名なマンガ作品が世界各語に翻訳されていることが学べる。

## 『暗殺教室』が描く学校・教師・家庭

### 差別構造としての学校システム

上の「あらすじ」でも記したとおり、物語の舞台となった中学校と高等学校を併設する椋ヶ丘学園は、その内部に「落ちこぼれ」クラスを作り、彼らを差別することで、他の生徒を勉学に向かわせる構造を持つ。「（落ちこぼれのE組の相手ならば）何を言おうが何しようが私が正義だ」という台詞のように、その差別は露骨なものだ。

作者はそれを、学園外の防衛省から派遣された烏間という登場人物に「極少数の生徒を激しく差別することで…大半の生徒が緊張感と優越感を持ち頑張る訳か 合理的な仕組みの学校だ」と評論させた。その烏間は一方で「切り離された生徒達は…たまったものでは

ないだろうな」と述べる。また、E組の生徒が「相手が弱いと見たら…俺もああいう事しちゃうのかな」、「E組じゃなかったら僕は… E組の皆にどう接していただろう」と考える場面がある。

この差別構造は、現実社会でも「学歴社会」、「偏差値至上主義」などと名付けられ、批判されてきたが、一向に消滅する様子はない。『暗殺教室』はフィクションのマンガであり、戯画化しているものの、現実にある差別構造を上手く表現している。そして、読者の多くはこの批判的な描き方に刺激され、差別されるE組の生徒たちに共感するのだろうと考えられる。

### 理不尽との戦い

上記のように、差別されるE組の生徒の前に現れたのが、殺せんせーである。殺せんせーは、理不尽な差別を受ける生徒の学力を向上させるため様々な課題を与える。全員の長所と短所を踏まえたうえで、個々人に異なる課題を出すのである。また、「暗殺」という通常ならば考えられない依頼を受け、そのための身体的な訓練を受けている生徒は、徐々に自信を育み、「楽しんで理不尽と戦おう」という言葉どおり、学校生活を謳歌するようになる。

殺せんせーや生徒たち自身の努力によりE組が、学年トップのA組の優等生たちに試験や体育祭などで勝つことにより、E組のみならず、学校全体の雰囲気が変わってくる。それが、「E組が優等生集団に勝つことで見る目が変わってくる」という言葉で表されている。

E組の活躍に対し、理事長は差別システムで生徒を伸ばす教育方針が瓦解することに危機感を抱き、様々な手段で横槍を入れる。しかし、理事長は最終的に変わる。実は、彼は殺せんせーのように、高邁な理念を持ち、実践した過去があったのだ。殺せんせーと生徒たちは、校内で理不尽なシステムを作り上げ、強化してきた理事長をも変えていくのであった。現実的には、そのようなことは、まずできない。その鬱屈とした気持ちを抱く子どもたちは、この作品世界に惹かれるのだろう。

### 学歴価値観に縛られる家庭・親

主人公やその他の登場人物は、家庭においても学校と同じ価値観で縛られている。例えば、「家族に認められる方が大事」と述べ、同級生を裏切り、E組を脱出しようとした優等生が登場する。また、その彼を庇い、「親の鎖って… すごく痛い場所に巻きついてきて離れない」「(その)呪いの解き方を学校の授業は教えてくれない」と、裏切り者の優等生を批判する同級生も出てくる。裏切り者になってしまった優等生を、殺せんせーは「家族に認められるためだけに…君は自由な自分を殺そうとしている」、「でも君ならいつか 君の中の呪縛された君を殺せる日が必ず来ます それだけの力が君にはある」と励ます。

親の鎖、呪いによって「自由な自分を殺」すことを、主人公は「僕等のうちの何人かに

は「呪い」がかけられてる（優等生）がその呪いに殺されていくように感じた 呪いの解き方を… 学校の授業は教えてくれない」と思う。作品の登場人物だけではなく、学校の差別構造を無意識のうちに自身の価値観に組み込んでいる人は、現実社会にも大勢いるだろう。学校を卒業し、社会人になり、親や祖父母となっても、その価値観が変わらない人は、子どもにその価値観を刷り込むこととなる。

それを体現しているキャラクターが主人公の母親である。思わぬ「暗殺の才能」を持つことに気づいた主人公は、進路指導の場で「殺し屋になるべきでしょうか」と殺せんせーに尋ねる。殺せんせーは「君の「勇気」は…「自棄」を含んでいる」「僕ごときどうなっても別にいい」と 君自身の安全や尊厳をどこか軽く考えている（中略）どうして君がその才能を身につけたのか…もう一度見つめ直しなさい そうする事で君の才能は何のために使うべきか 誰のために使いたいかが見えてくるはず」と答える。

母親は、息子である主人公を自身の夢を叶える存在として扱っている。彼女の「許さない… 渚（わたし）の人生を邪魔する奴は」という台詞があるが、「渚」という息子の名前に、「わたし」という母親の一人称のルビが振られたように、主人公に自身を重ねている。母親は「挫折の傷は人を一生苦しめるの」、「アンタ（主人公の渚）のためよ」と述べつつも、自身の挫折の傷を回復したいのだった。母親は、有力大学である螢大（螢雪大学）の入試に失敗し、「世界中を飛び回る仕事」ができる名門商社の菱丸（丸紅商事と三菱商事を混ぜた架空名称であろう）にも入れず、挫折感を抱いている。「ルックス重視の総合商社」で女性社員として活躍したかった自身の夢を息子に叶えさせるため、「女の子が欲しかった」と言い、髪型も女のように長くさせるなど髪型すらも支配している。主人公は「僕の人生の主人公は僕じゃない 僕は… RPG「母さん」の2周目だ」と述べる。RPGは、無論、ロールプレイングゲームであり、母親の人生を、自分も辿らされていることを表している。また、主人公は「産んで育ててくれただけで… すっごい感謝してる（中略）一ただ我が子がこの世に生まれて そこそそ無事に育っただけで喜んでくれたら 全てが丸く収まるのに」とも考えている。

殺せんせーは、「渚君の人生は渚君のものだ 貴女（母親）のコンプレックスを隠すための道具じゃない」と母親を諭し、「君の人生の1周目は…この教室から始まっているんです」と主人公を励ます。母親と向き合う勇気を得た主人公は、「卒業までに…結果を出します 成功したら…髪を切ります（中略）母さんからも 卒業します」と母親に伝える。物語の最後の方で、母親は「正しいと思うならそうしなさい」と、危険な冒険に出かける主人公を送り出す。主人公は「ちゃんと見て信頼してもらえん事が 心と体をこんなに軽くするなんて！！」と明るい気持ちで家を後にする。

極度に厳格で、自身の価値観を押し付けてくる保護者に悩む子どもたちが、この物語に惹かれたであろうことは容易に想像できる。そして、筆者が関わった学生たちを思い浮かべると、そのような子どもは決して少なくないと推量される。

## 理想の教師像

「あらすじ」の項目でも述べたとおり、殺せんせーは所謂「反抗期」の生徒の気持ちを掴むことにも長けている。例えば、学業成績が非常に優秀で、虐められた生徒を助けるため、加害者の上級生に怪我を負わせたことで、E組に転落させられたカルマである。それまで自身を高く評価していた担任教師の豹変ぶりに、カルマは「心から殺す」、「生きていても人は死ぬ」と絶望の淵に追いやられ、荒れていく。殺せんせーは「見捨てるという選択肢は先生には無い」と述べ、「手入れ」という言葉で表されるコミュニケーションを通じてカルマの気持ちを解きほぐしていくのであった。

殺せんせーは、自身を狙う暗殺者だとしても、生徒であれば見捨てないという設定である。自律的に殺せんせーを狙うAIや、殺せんせーと同じ方法で身体改造された少年をクラスに馴染ませ、生徒同士の関係も良くしていくのであった。例えば、同級生に親近感を覚えるような改良を加えられたAIを、開発者が元に戻そうとするが、AI自身の判断で改良をさせないプログラムを走らせ、それを阻止する場面がある。これは親に反抗する子どもの比喻とも捉えられる。作品では、殺せんせーが見捨てず救ってきた人々は、「暗殺に行った殺し屋は暗殺対象（ターゲット、殺せんせー）にピカピカにされてしまう」と表現される。「ピカピカ」のいい生徒、善き人間になるのである。また、生徒たちは、このような関係が結べるクラスを「それが僕等の暗殺教室」と表現し、正面から生徒に向き合ってくれる殺せんせーに対し「明日はどうやって殺そうかな」と親愛の情を示すのであった。この作品では、例えば「暗殺予告」に「エール」とルビが振られたように、生徒たちの殺せんせーに対する真剣な取り組みを「殺す」という言葉で表現しているのである。

殺せんせーは単に優しいだけではない。自身の能力を過信し、増長し、その結果、大きな失敗をした生徒に対し、「君達は強くなりすぎたのかもしれない 身につけた力に酔い弱い者の立場に立って考えることを忘れてしまった それでは本校舎の（E組を差別する）生徒と変わりません」と真剣に叱責する場面がある。生徒たちは、「強くなるのは自分の為だと思ってました 殺す力を身につけるのは名誉とお金のため 学力を身につけるのは成績のため でも身につけたその力は他人のためにも使えるんだって思い出しました」と述べる。「失敗も挫折も成長の源」という言葉のように、生徒たちは殺せんせーの叱責と、生徒たちの失敗で大怪我を負わされた人が営む場で働くという課題をすることで、さらに成長するのだった。

また、上記カルマが試験で思わぬ敗北を喫したとき、「大きな敗北を知らなかったカルマ君は…期末テストで敗者となって身をもって知ったでしょう 敗者だって自分と同じ色々考えて生きている人間なんだと」と、彼の心情を殺せんせーは分析する。負けることの重要性や意義、敗者の気持ちを汲むことは現実世界でも重要である。

殺せんせーは「先生と生徒は馴れ合いではありません。そして夏休みとは先生の保護が及ばない所で自立性を養う場でもあります」と夏期休暇の意義も語る。このように殺せん

セーは倫理や知識、思慮深さなどにとどまらず、愛嬌も備えた完璧な理想の教師である。その影響を受けた主人公は、一教師を目指し、また違法薬物に手を出す別の学校の生徒に「(違法薬物は)吸ってカッコよくなるかどうかは知らないが 確実に生きづらくなるはなるだろう」と論ず。他にも、ある生徒に、「接待術も交渉術も社会に出たとき最高の刃になりそうじゃない?」と言わせるなど、生徒たちの社会的な学びが深まっていくことも表現されている。

また、殺せんせーは、教師自身の成長についても「先生だって学習するんです 先生が日々成長せずして…どうして生徒に教える事ができるのでしょうか」と重要なことを述べるシーンもある。マンガの中だけではなく、現実でも社会や技術は常に変化し続け、そのために教えるべきことも変わっていく。教員はそれに対応するため、学ぶ力は欠かせない。そして、このことは教員だけではなく、人間すべてに該当するだろう。このような殺せんせーの「生き方」は、子どものみならず大人にも深い感銘を与え、自身を振り返る契機となる。倫理や道徳においても参考書となるだろう。

### まとめと根源的な問題

マンガ評論を長年続けている藤本由香里はこの作品を次のように評論している。テーマを教育そのものにおいた「超下級の学習マンガで」、生徒は「体力と気力と、学習能力の限りを尽くし」先生に向き合い、最後は「師を超える」という、「教育の、究極の理想」を描いているという<sup>(6)</sup>。教育評論家の尾木直樹は、この作品の映画の舞台挨拶で「ぜひ教育関係者に観てほしい。理想の教育論」と述べた<sup>(7)</sup>。いずれも、そして筆者も、この作品は理想の教育を描く名作であると評価する。また、そのような「大人・教師」側ではない、学校で「教えられる側」とされている児童生徒、つまり子どもたちの支持をも得、ヒット作となった。筆者が子どもだったとしても、この作品に熱中しただろう。

作者の松井優征は単行本21巻の「あとがき①」に、殺せんせーの台詞について「決して上辺だけで考えたものではな」と書いている。また、作品を描くうえで「人間が社会で当たる壁やその解決法などは自身の経験や知人の相談に乗る過程で、自分なりに真剣に考えた事も役立ったと思」う、とも記している。過酷な競争に晒されたマンガ家業界で人気を誇る作品を送り出せる松井は一家言を持っており、実際に『暗殺教室』で記された言葉には、多くの社会人が首肯できそうなものや、目から鱗が落ちそうなもの、深く考えさせられるであろうものが多々あった。

一方、このような教育はどこまで実現できるか、という問題がある。住宅ジャーナリストの榊淳司が週刊文春の『阿川佐和子のこの人に会いたい』でインタビューされた東京都の千代田区立麹町中学校で目覚ましい活躍をしている工藤勇一校長について、興味深い発言をしている<sup>(8)</sup>。榊は、工藤のような校長がいるのは悪くない、工藤は教員には珍しく頭が柔らかいと評価する一方で、学校で斬新な事ができるのはこの人がいるからであり、工

藤がいなくなれば成立しない、と述べた。工藤を殺せんせーに置き換えれば、殺せんせーのように優れた教員はほぼおらず、『暗殺教室』で描かれた理想の教育は実現困難であると謂える。少なくとも殺せんせーの如く、生徒全員の個性や能力を的確に把握し、個々人に合う課題を作るのは10人超のクラスでは難しいであろう。しかし、これはまだ解決可能な範囲の問題である。クラスの生徒数を減らし、特に有能な人を教員に登用する制度を作れば可能だろう。

しかし、もっと大きな問題がある。上段で触れた榊は、同じ動画内で、そもそも運動会をはじめとする小学校以外の学校は必要か、という問題提起をしている。コロナ禍における遠隔授業や、それ以前から発生している引きこもりや不登校者増加など様々な問題、インターネットとコンピューターの普及がもたらしている社会や経済の仕組みの大変革を鑑みれば、榊が述べるよう、これまでの日本でそれなりの成功を取めた学校教育は大きく見直されるべき時が来ているのかもしれない。しかし、『暗殺教室』が劇的で感動的で魅力的な作品であるがゆえに、現代社会の本当の問題、つまり、そもそも今の学校は本当に必要なのか、という根源的な問題を不可視にさせてしまう「リスク」がある。『暗殺教室』が、学校制度が常識として存在する日本社会で名作、快作として受容された21世紀初頭の時代を表す、過去の文献として捉えられる未来があるのかもしれないが、当分、それが来ることは叶わないだろう。

## 謝辞

本稿は名古屋芸術大学の個別研究費および平成31(2019)年度特別研究費(課題名「高大接続教育、大学教育、社会人教育における児童・ヤングアダルト文学作品およびマンガ作品の教材としての利用(前年度の継続・発展課題)」)の助成を受けた。娯楽マンガは日本国内の作品に限ったとしても数多ある。その中で、複数の学生から現在の若年層に人気のある作品を教えて貰い、今回の『暗殺教室』を知るに至った。また、名古屋芸術大学の教員および助手、事務職員の方々にご示唆を頂いた。編集と出版に尽力して下さった名古屋芸術大学図書館の教職員各位、校正にあたられた印刷・製本会社の方にも感謝する。

## 文献および註

- (1) 茶谷薫、「学習マンガ」ではなく「娯楽マンガ」を教材利用する意義—『スター・レッド』を例に、名古屋芸術大学教職センター紀要9号、2020、1-13頁
- (2) 松井優征、2020、暗殺教室、初版、集英社、東京、2012～2016、1～21巻
- (3) 2巻以降の扉絵の後ろにはあらすじや登場人物紹介などに該当する「殺新聞」、その次の頁には目次がある。マンガに限らず多くの書籍は印刷時に1枚の紙に両面で16頁分印刷する。そのため、マンガ単行本は、本編や目次などを入れ、余る頁には別の物を付録のように掲載するのが通例である。『暗殺教室』では、1巻末には「殺せんせーの

絵描き歌」が2頁、2巻と3巻の末にはキャラクターの設定集などを掲載し、16頁単位になるようにしてある。その他、連載誌所収の各話が単行本に所収される時に白紙となってしまう見開きの右側頁に、主要登場人物の紹介、本編の深刻さを和らげるエピソードマンガ、舞台となる学校の「連絡掲示板」という体裁で校則の詳細、本編には表れない学校のマスコットキャラクターを登場させたマンガなどがある。

- (4) 5～8巻末にSCRAPが作成した問題が出され、当該巻の次巻末にその解答が掲載されている。5巻は論理学、6巻はクロスワード、7巻は漢字などの言葉遊び、8巻は平仮名の五十音表や数字の並び順と単行本のカバーを組み合わせた発想力が重要となる問題がそれぞれ掲載されている。
- (5) 松井優征、久麻當郎、阿部幸大による『暗殺教室 殺たんA』（2014）、『暗殺教室 殺たんB 基礎単語でわかる! 熟語の時間』（2015）、『暗殺教室 殺たんC 解いて身につく! 文法の時間』（2016）、『暗殺教室 殺たんD センター試験から私大・国立まで! 問題集の時間』（2017）。松井優征、日下部匡俊、東京大学数学対策チームによる『殺すう まるごと中学基礎数学』（2016）。全て集英社のジャンプ ジェイ ブックスシリーズである。
- (6) 「これも学習マンガだ!」WEBサイト内ページ「暗殺教室 推薦者コメント」。  
<https://gakushumanga.jp/manga/%E6%9A%97%E6%AE%BA%E6%95%99%E5%AE%A4/>
- (7) 「Automotive media Response」WEBサイト内ページ「尾木ママが映画『暗殺教室』を絶賛…「理想の教育論ね」」。2015年3月30日（月）06時00分付。  
<https://response.jp/article/2015/03/30/247805.html>
- (8) Youtubeに作られた榊淳司チャンネル内にアップロードされた動画、「麹町中学校長・工藤勇一氏のインタビューに想う by 榊淳司」。2019年06月21日付。  
<https://response.jp/article/2015/03/30/247805.html>